

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターにおける 中・上級の日本語学習者に対するニーズ調査報告

結 城 佐 織

【要旨】

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターに於いて 2018 年 9 月 3 日（水）～9 月 12 日（水）、2018 年 12 月 21 日（金）～2018 年 1 月 16 日（水）の 2 回、中・上級の日本語学習者にニーズ調査を行った。更に第 1 回の調査の結果について教員 10 名にインタビューを行い、第 1 回と第 2 回の結果について学習者 9 名にインタビューを行った。第 1 回の調査結果について、多くの項目で学習者のニーズと教員の認識に大きな隔たりは無かった。勤務の長い教員については以前の学習者との異なりを語る教員が多く、他校でも勤務している教員は他大学との比較からアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの教育方法を見ていた。また、第 2 回の調査結果において変動した項目の多い学習者は、進路変更、学習者自身の能力の変化、授業からの影響によるものであった。本稿は日本研究の専門家や実務者を目指す中・上級の日本語学習者が日本語教育に何を求めているのかを、ニーズ調査とインタビューを基に報告したものである。

【キーワード】

日本研究、実務、専門家、大学院生

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（以下、IUC）は、北米の大学生・大学院生などを対象に、学術または実務において高度なレベルの日本語が必須である者の中・上級レベルの日本語教育を行う機関である。北米の 14 大学の教授陣により構成される代表委員会が管理運営をしている（参照：IUC 2019）。水谷修（1997: 3-4）は IUC の教育内容について「優れた日本研究者、日本語に深い洞察力と高度な運用能力を持った日本研究者の育成の価値をもう一度見つめ直すべき大切な時期に来ていると思う」と述べている。水谷修（1997）から 20 年たった 2017 年、今一度 IUC の方向性を検討する必要があると考え、2017-18 年度に「カリキュラム検討委員会」（以下、検討委員会）を発足した。Tony & Maggie（1998: 121）は言語学習に関して「The key stages in ESP are needs analysis, course (and syllabus) design, materials selection (and production), teaching and learning, and evaluation. These are not separate, linearly-related activities, rather they represent phases which overlap and are interdependent」²と述べており、IUC の検討委員会でもポリシー、コース設計、シラバス、

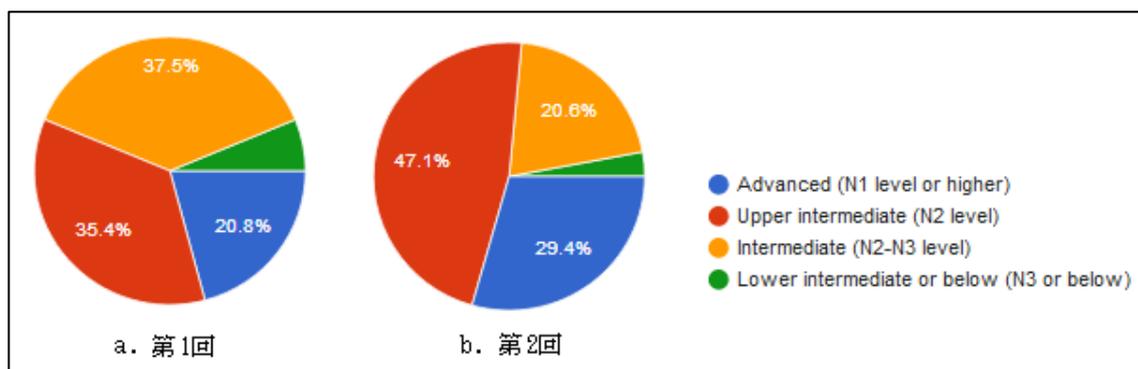
カリキュラム、評価等を検討している（参照：佐藤 2018、結城 2019）。

Tony & Maggie (1998: 122) は言語学習機関におけるニーズ分析の必要性について「Needs analysis is neither unique to language teaching - needs assessment, for example, is the basis of training programmes and aid-development programmes - nor, within language training, is it unique to LSP and thus to ESP. However, needs analysis is the corner stone of ESP and leads to a very focused course」³と述べている。また若林 (1999: 69) はニーズ分析の必要性について「ニーズ分析にも2種類あって、客観的ニーズ分析では教師としてどのようなコースを設定したらいいか、カリキュラムはどのように組んだらいいかというゴール設定に必要な情報となるし、主観的ニーズの分析ではそのコースで何が欠けているか、予期していたとおりの学習ができていないか、学習者は何を欲しているかがわかり、授業が再評価できる情報を与えてくれる」としている。日本語教育に関わるニーズ調査やニーズ分析は、留学生に対するものだけでも岡野 他(1989)、佐藤 他 (2002)、峯 他 (2004)、金田 他 (2006)、孟 他 (2014)、英保 他 (2014)、中田 (2015)、須藤 (2016)、佐野 (2018) など多く存在する。日本語教育に関わるニーズ調査の内容は、生活面（住居、アルバイトを含む）、人間関係、学習環境（教育機関の施設を含む）、学習動機、学習面（教員への評価を含む）、教材面、授業の満足度などの評価も含むなど多岐に渡り、調査対象者も学部生、大学院生、社会人、技能研究者などであり、各調査によってどの側面を、どのような質問項目で、誰を対象に調査するのかは異なる。この異なりは Tony & Maggie (1998: 123) が「A confusing plethora of terms exists: needs are described as objective and subjective (Brindley, 1989:65), perceived and felt (Berwick, 1989: 55), target situation / goal-oriented and learning, process-oriented and product-oriented (Brindley, 1989: 63); in addition, there are necessities, wants and lacks (Hutchinson and Waters, 1987: 55)」と指摘しているように「Needs」の概念や解釈が様々であることによるだろう。但し先行研究を見る限り、①教育機関側の教育目標に即した質問項目を設定する、②学習者が①を欲しているかどうかを確認する、③ニーズ調査の結果は学習者の属性によって特徴がある、④ニーズ調査やニーズ分析の結果をカリキュラムや授業に反映させる方向性で検討する、という傾向がみられる。

本稿はIUCにおけるカリキュラム改良の参考とすることを目的とし、検討委員会の活動の一環として2018-19年度に日本研究者や実務者を指す中・上級の日本語学習者であるIUCの学習者に対し、ニーズ調査を行った報告である。2018-19年度の修了者は、博士課程・専門職18名、修士課程・修士課程修了18名、学部卒18名、学部生1名となっており、大学院生・専門職が65.5%を占めている⁴。年齢は20代後半から30代が中心である。学習者の専門は、文学、古典、歴史、法律、人類学、政治、美術、日本語教育、言語学、翻訳・通訳、地域研究、コンピューターなど多岐に渡り、アメリカ等でTAの経験がある学習者、実務者として職についており休職してIUCに進学する学習者もいる。アメリカ国籍、カナダ国籍を有する学習者が多くを占めるが、近年はアジアや欧州の国籍の学習者も

増加しつつある。図1は第1回（前期初頭）と第2回（後期初頭）の調査時に、学習者に日本語能力の自己評価を行ってもらった結果である。調査では①上級（N1 レベル以上）、②中上級（N2 レベル）、③中級（N2-N3 レベル）、④初中級未満（N3 レベル以下）の4つの選択肢を設定した⁵。

図1 学習者の自己評価による日本語能力



IUC は前期に日本語の中級までの基礎力を固め、後期に専門的な日本語に注力するというカリキュラムになっている。このためニーズ調査の第1回を入学時（前期初頭）に行い、ニーズの変化やニーズの変化の理由を探るために、第2回（後期初頭）の調査を行った。IUC には日本研究者を目指す大学院生、実務者を目指す学習者が多いため、質問項目も日本研究や実務に関するものを中心に設定している。また、第1回のニーズ調査の結果を踏まえ、教員が学習者のニーズを把握していたかを知るため、教員にアンケートとインタビューを行っている。更に第1回と第2回のニーズ調査の結果を踏まえ、9名の学習者にインタビューを行った。

本稿は年度内に2回の調査を行い、日本研究の専門家や実務者を目指す中・上級の日本語学習者が日本語教育に何を求めているのかを、ニーズ調査とインタビューを基に報告したものである。

2 調査方法

本稿では①学習者に対するニーズ調査、②教員に対するニーズ調査の結果に対するアンケート・インタビュー、③学習者に対するニーズ調査の結果に対するインタビューの3つを行っている。2-1、2-2、2-3 に概要を載せる。

2-1 ニーズ調査の概要

調査目的： IUC の日本語学習者が、IUC でどのような日本語教育を受けたいと思っているのか、ニーズが変化する理由は何か、を知りカリキュラムの改良の参考にする

調査期間： 第1回 2018年9月3日（水）～9月12日（水）
第2回 2018年12月21日（金）～2019年1月16日（水）

調査方法： GoogleForm、記名式、メールアドレス回収、英語（資料1）

調査対象： アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの2018-19年度の学習者

回収数： 第1回 48/56人 (85.7%)

第2回 34/56人 (60.7%)

*第1回、第2回ともに回答した学習者32名、全体の58.2%

2-2 教員へのアンケート・インタビューの概要

調査目的： 第1回ニーズ調査の結果に対する教員の見解から学生の意識との有無を知る

調査期間： 2018年10月15日～2018年12月20日

調査方法： ①記述式アンケート、②インタビュー

調査時間： インタビューは10-30分程度

調査対象： アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの教員6

アンケート回収数： 8/14人 (57.1%)

インタビュー実施人数： 10/14人 (71.7%)

記述式アンケートの項目（記名式）は、①印象に残った項目、またその理由、②予想通りだと思った項目、その理由、③予想外だと思った項目、その理由、④授業内容や方法を変えようと思ったか。あれば具体的に、⑤全体の感想の5つである。インタビューでは、ニーズ調査の結果のグラフを提示しながら、記述式アンケートに回答した教員に対しては、アンケートの結果についてさらに詳しく尋ねた。記述式アンケートに未回答の教員に対しては、記述式アンケートの内容から尋ねた。

2-3 学習者へのインタビューの概要

調査目的： 学習者のニーズの変化の理由を探る

調査期間： 2019年4月22日～7月15日（月）

調査方法： 対面インタビュー、録音有り

調査時間： 15-30分程度

調査対象： アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの学習者9名

インタビュー対象者の選抜方法は、①3-2-2の「求めるクラス運営のあり方」で3ポイント以上変化した項目（例 7→4 / 1→5）と②3-2-3の「日本語能力の各技能の重要度」で2ポイント以上変化した項目（例 4→2 / 1→4）が合わせて5つ以上ある学習者13名をニーズの変化が多い学習者とし、13名のうち9名からインタビューの了承を得た。尚、第2回ニーズ調査の追加項目で述べた<36>の設問においてニーズの変化を記述した学習者は10名おり、10名中4名はインタビュー対象者9名の中の4名と重なっている。

3 ニーズ調査の結果

3-1 ニーズ調査の質問項目の設定

質問項目は資料1、資料2に載せた。質問項目の分類として、①IUCを選んだ理由、②日本語学習の目的、③求めるクラス運営のあり方、④学習者自身の日本語能力（図1）、⑤日本語能力の各技能の重要度（読解能力、文章表現、聴解能力、口頭表現、口頭表現・聴解能力、漢字能力）の5つを設定した。以下本稿では、便宜のため資料1、資料2の質問項目番号を<>で示す。

3-2 ニーズ調査の結果

3-2-1 IUCでの日本語の学習動機

第1回の調査でのみ<1>「IUCを選んだ理由」と<2>「日本語の学習の目的」を聞いた。<1>の結果は表1、<2>の結果は表2の通りである。

表1 <1>IUCを選んだ理由

回答の選択肢	数 /48	割合(%)
専門や実務に関する日本語が伸ばせるから	48	100
IUCに進学すると利益がありそうだから	43	89.6
先生や先輩、大学等に薦められたから	37	77.1
奨学金がもらえたから	35	72.9
他の専門分野の人との交流ができるから	27	56.3
有名だから	12	25
その他 ⁷	5	10.4

*複数選択可

表2 <2>日本語学習の目的

回答の選択肢	数 /48	割合(%)
日常生活・日常会話ができるようになりたいから	36	75.0
研究に日本語が必要だから	31	64.6
趣味に必要だから	23	47.9
ビジネスや実務に日本語が必要だから	22	45.8
通訳者・翻訳者になりたいから	11	22.9
その他	7	14.6

*複数選択可

表1の「専門や実務に関する日本語が伸ばせるから」が100%というのは、IUCが「専門や実務」に関する日本語学習を行う場であるとの認識が全学習者にあることを示している。これは「良く分からない機関だが進学を決めた」というようなあいまいな目的ではないことがわかる。

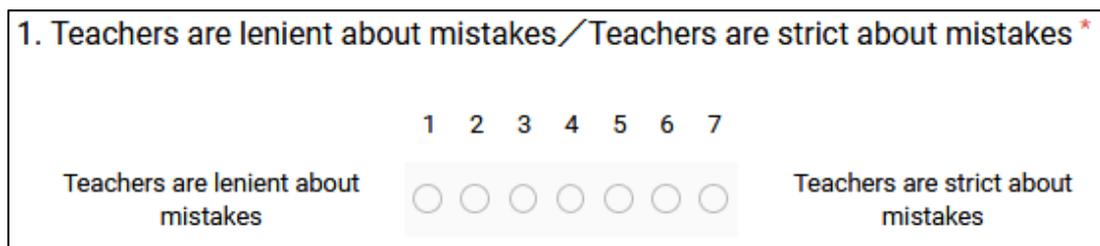
表2では、研究目的が64.6%、実務目的が45.8%である。注目すべきは表2の「日常生活・日常会話ができるようになりたいから」が日本語学習の目的の中で75.0%を占め、研究や実務よりも割合が高い点である。複数回答が可能である設問であったことを考慮すると、研究に必要でありかつ日常会話も必要だと考える場合と、日常会話は研究や実務などの専門的な日本語よりも簡単だと解釈し当然必要だと考える場合、更に日本に滞在してみても専門的な話ができるが日常会話や事務手続きなどの際に自らの日本語が通じないという経験からという場合が考えられる。現在検討委員会では、IUCのカリキュラム・ポリシーとして「教養ある日本人と対等に意見交換ができる」（結城2019:193,201）ことを提案している。中・上級の日常会話・日常生活の日本語をどのようにカリキュラムに取り入れるか検討すべき課題である。

また表1の「先生や先輩、大学等に薦められて」、「IUCに進学すると利益がありそうだから」の割合が高いというのは、これまでのIUCの日本語教育に一定のニーズがあると言えるだろう。

3-2-2 求めるクラス運営のあり方

「求めるクラス運営のあり方」に関しては、表3のようにスケール型の1-7から一箇所を選択し回答する方法にした。

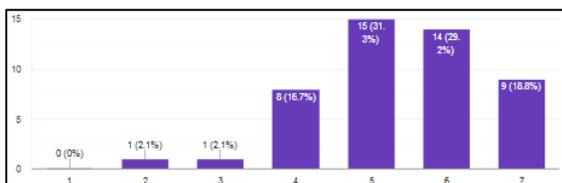
表3 「求めるクラス運営のあり方」の聞き方



第1回と第2回の全回答者の「求めるクラス運営のあり方」の結果を、図2から図8に挙げる。縦軸は回答数、横軸は表3のスケールの数字、< >は全体の質問項目番号である。第1回と第2回では母数が異なるため、傾向を把握しやすくする補助として図2から図8の第1回の図aの視覚上の形を類型化した。図2aを山型、図3aを右肩上がり型、図4aと図8aを山谷型（図4aは左山谷型、図8aは右山谷型）、図5aと図7aを突出型（中央）、図6aを左肩上がり型とする。

図2 <3>先生が間違いに寛容／先生が間違いに厳しい

a. 第1回



b. 第2回

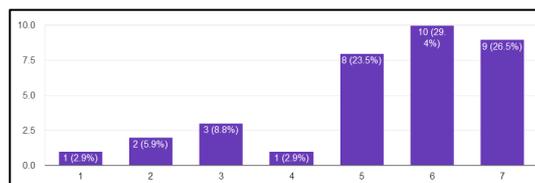
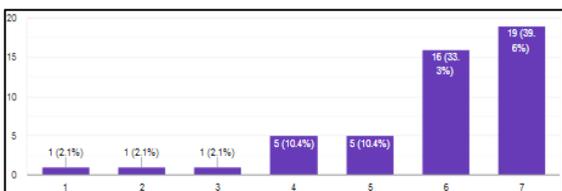


図3 <4>日本語の間違いに寛容／日本語の間違いに不寛容

a. 第1回



b. 第2回

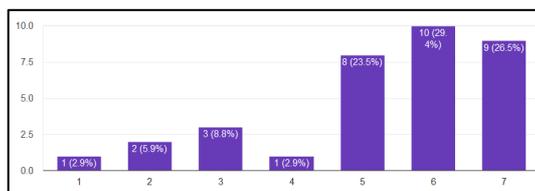
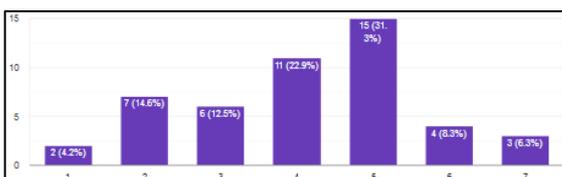


図4 <5>身近な話題で、話す機会が多い／抽象度が高く、話す機会は減る

a. 第1回



b. 第2回

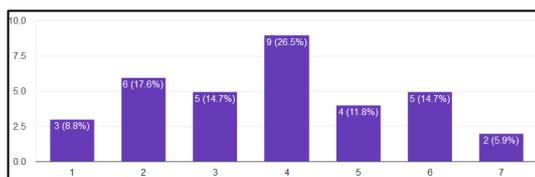
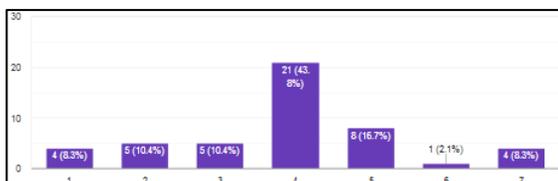


図5 <6>リスニング・スピーキング／ライティング・リーディング

a. 第1回



b. 第2回

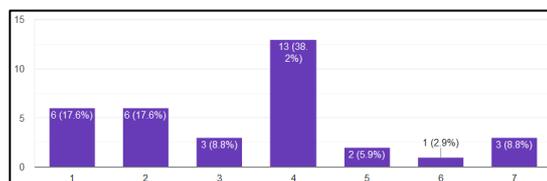
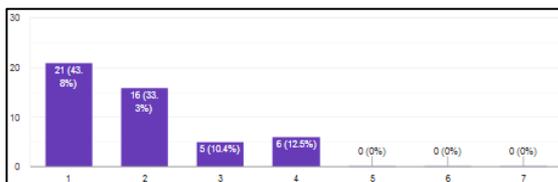


図6 <7>活動形式／講義形式

a. 第1回



b. 第2回

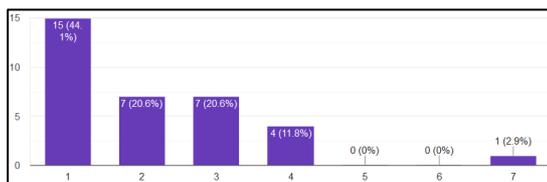
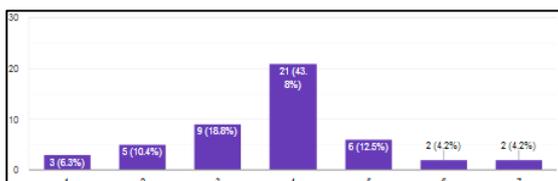


図7 <8>明るく楽しいクラス／まじめで真剣なクラス

a. 第1回



b. 第2回

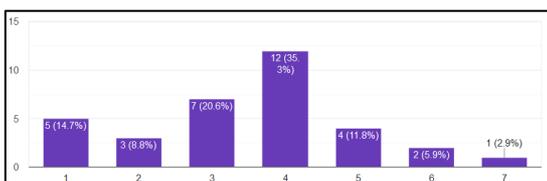
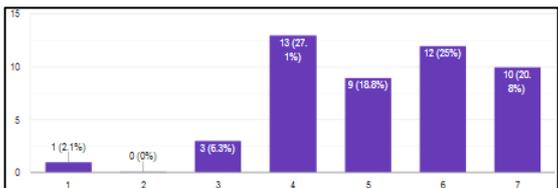


図8 <9>日常的な日本語／専門や実務に関する日本語

a. 第1回



b. 第2回

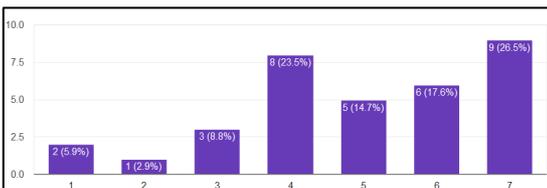


図2から図8を見てみると、IUCの学習者のニーズとしては、研究や実務に関する日本語を運用することを求めており、間違いには学習者は厳しく、「正しい」日本語を要求していることが分かる。これはIUCの求める学習者像とも一致している。佐藤(2018: 145)は「かつてのような『会話は苦手だが文献は読める』学生よりも、『会話は得意だが文献を読むのは苦手』という傾向の学生が増加している」と指摘している。第2回調査においてクラス活動としてライティング・リーディングよりもリスニング・スピーキングを必要とする学習者が増加している点については、IUCでは授業で意見を述べる機会が多いから

ではないかと推察される。もう一つの理由については4で触れている。

次に、第1回と第2回のニーズ調査の両方に回答した学習者のニーズの変化に注目してみる。第2回のニーズ調査の回答者は34名であり、うち第1回と第2回の両方に回答した学習者は32名である。第1回と第2回の調査の両方に回答した学習者32名を「2回回答者」とし、2回回答者の平均をそれぞれ「第1回平均 2回回答者」（表中、1回）「第2回平均 2回回答者」（表中、2回）として表4に載せた。第2回のみ回答した学習者は2名であり、本稿では便宜のため第2回平均全体の値は載せていない。紙面の都合上、図の比較は割愛したが、図2から図8のbの型と「第2回平均 2回回答者」の型はほぼ同じである。参考のために第1回のニーズ調査の学習者48名の結果の平均を、表4の「第1回平均 全体」（表中、1全）として載せた。

表4 「求めるクラス運営のあり方」の結果

番号	質問項目	1全	2回回答者	
			1回	2回
3	先生が間違いに寛容[1]／先生が間違いに厳しい[7]	5.4	5.3	5.4
4	日本語の間違いは多いが、伝わる[1] ／日本語の間違いを少なく、伝える[7]	5.8	5.7	5.4
5	身近な話題だが、話す機会が多い[1] ／話す機会は減るが、抽象度が高い[7]	4.1	3.7	3.9
6	リスニング・スピーキング[1] ／ライティング・リーディング[7]	3.9	3.7	3.4
7	活動形式[1]／講義形式[7]	1.9	1.8	2.1
8	明るく楽しいクラス[1]／まじめで真剣なクラス[7]	3.8	3.5	3.5
9	日常的な日本語[1]／専門や実務に関する日本語[7]	5.2	5.2	4.9

*左の番号はニーズ調査の質問項目番号（参照：資料1資料2）

*[]は図2から図8における左側を[1]、右側を[7]として表したもの

「第1回平均 2回回答者」と「第2回平均 2回回答者」で0.3ポイント以上の変化があったのは<4>、<6>、<7>、<9>である。ニーズの変化の全体の傾向としては、図2から図8の型を見る限り、図2の山型が山谷型に、図3の右肩上がり型が山谷型に、図5と図7の中心突出型が山谷型に変化した。前期が終了し後期が始まる時点の第2回のニーズ調査では、「求めるクラス運営のあり方」に対するニーズのばらつきが目立つようになっている。これについても4で触れる。

3-2-3 日本語能力の各技能の重要度

「日本語能力の各技能の重要度」に関しては表5のように1（重要ではない）から4（非常に重要）のスケールから一つを選択する方式にした。

表5 「日本語能力の各技能の重要度」の聞き方

Ability to read academic articles, books, and materials related to my research *					
	1	2	3	4	
not important	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	extremely important

「日本語能力の各技能の重要度」では、言語学習の4技能「読解能力、文章表現、聴解能力、口頭表現」のほかに、日本語学習には必須である「漢字能力」と、峯他 (2015: 54) を参考に研究発表やフィールド・ワークなどで必須である「口頭表現・聴解能力」を項目に設定した。表6から表11に「日本語能力の各技能の重要度」の結果を載せた。紙面の都合上、図は割愛する。

表6 読解能力

番号	質問項目	1全	2回回答者	
			1回	2回
11	論文や書籍、資料などの研究関連の文書が読める	3.6	3.6	3.3
12	資料や雑誌、メールなどのビジネス関連の文書が読める	3.3	3.3	2.8
13	一般書、新聞が読める	3.4	3.3	3.4
14	日常生活に必要な案内や書類、メールが読める	3.5	3.6	3.7

表7 文章表現

番号	質問項目	1全	2回回答者	
			1回	2回
15	論文が書ける	2.6	2.5	2.3
16	会議資料等ビジネス関係の資料の作成ができる	2.8	2.5	2.4
17	プレゼンテーションの原稿の作成ができる	3.1	3.2	3.0
18	一般的な内容の作文が書ける	3.2	3.1	2.8
19	メールが書ける	3.7	3.8	3.7

表8 聴解能力

番号	質問項目	1全	2回回答者	
			1回	2回
20	講義・学会・研究会等での内容が聞き取れる	3.7	3.7	3.4
21	仕事等でのプレゼンテーションや会議の内容が聞き取れる	3.4	3.4	2.8
22	ニュースやラジオ番組、テレビ番組等が聞き取れる	3.4	3.2	3.5

表9 口頭表現

番号	質問項目	1全	2回回答者	
			1回	2回
23	専門的なことが話せる	3.5	3.3	3.0
24	実務的なことが話せる	3.3	3.0	2.8
25	複雑な話題について、論を展開しながら話せる	3.8	3.7	3.6
26	抽象的な話題について話せる	3.7	3.7	3.3
27	日常生活に困らない程度に、意思を伝えられる	3.7	3.7	3.7

表10 口頭表現・聴解能力

番号	質問項目	1全	2回回答者	
			1回	2回
28	学会や研究会などで研究に関する発表、質疑応答ができる	3.2	3.1	2.8
29	実務に関するプレゼンテーションでの発表、質疑応答ができる	3.0	2.8	2.6
30	専門や実務に関する議論、交渉ができる	3.6	3.5	3.2
31	インタビュー調査ができる	2.8	2.6	2.6
32	生活に困らない程度の会話ができる	3.6	3.6	3.6

表11 漢字能力

番号	質問項目	1全	2回回答者	
			1回	2回
33	漢字が読める	3.8	3.8	3.8
34	漢字が書ける（筆記）	2.4	2.3	1.9
35	漢字の意味が分かる	3.9	3.9	3.8

<11>から<35>までの図の型を挙げると、第1回と第2回において型が変わらず、特に重要度が高いとされたのは突出型（右）の<14>、<19>、<25>、<32>、<33>、<35>であり、続いて重要度が高いとされたのは右肩上がり型の<11>、<12>、<13>、<18>、<20>、<21>、<22>、<23>、<24>、<26>、<27>、<30>である。この突出型（右）と右肩上がりに対して重要度にばらつきが見られるのは山谷型（右）の<15>、<28>、山型の<17>、<34>である。第1回と第2回において型が変化したのは二種類あり、<16>は山型から山谷型へ、<29>、<31>は右肩上がりから山型になっている。

山谷型の<15>、<28>はいずれも研究に関する項目であり、研究者志望で無い学習者にとってはもともと重要度の低いものであり、学習目的と現在の属性によるものであろう。突出型（右）の質問項目を見てみると、日常生活に関係のある日本語、漢字の読み、漢字の意味が選択されており、学習者の専門に関わらず重要だと判断された結果であると考えられる。一方で<34>の「漢字が書ける（筆記）」は他の質問項目と異なり、山の頂点を左の2に持つ山型であり、重要度がかなり低いと判断されていることが分かる。<15>、<16>は「書く」の質問項目であるが、論文などの研究に関するもの、実務に関するものいずれも重要度が低い。これは日本で研究職あるいは実務職に就くつもりがあるのかどうかによるのではないだろうか。特にアメリカやカナダ等で研究職を考えている場合は、論文などは英語で書くことが多いためである。実務やビジネスに関する項目について重要ではないとしているのは、実際に職に就いたことのある学習者と、職に就いたことのない学習者で重要度が異なる可能性が高いだろう。所属などの属性による分析は後の稿に譲る。<29>、<31>は全体的に重要度が下がっている。IUCでは授業においてインタビュー活動を行う。現在の検討委員会ではインタビュー活動を行う意義があると考えているため、学習者に目的や学習効果などを明確に提示して行く必要があるだろう。

3-2-4 第2回ニーズ調査 追加項目

第1回の調査の後、教員から学習者が直接ニーズの変化を書き込む設問を設置してはどうかとの意見と、時間が無いと訴える学習者がいるが実際のところはどうなのか IUC の授業をこなすための学習時間を聞いてみたいとの意見が出され、第2回の調査で質問項目を設置した（<36>、<37>）。ニーズの変化（<36>）については5の「学習者へのインタビュー」に纏めてある。

第2回の調査の質問項目<37>でたずねた学習時間の結果を図9に示した。平均学習時間は5.2時間であり、全体の52.9%が5時間以下と答えている。

図9 <37>IUCの授業をこなすための学習時間・1日あたり

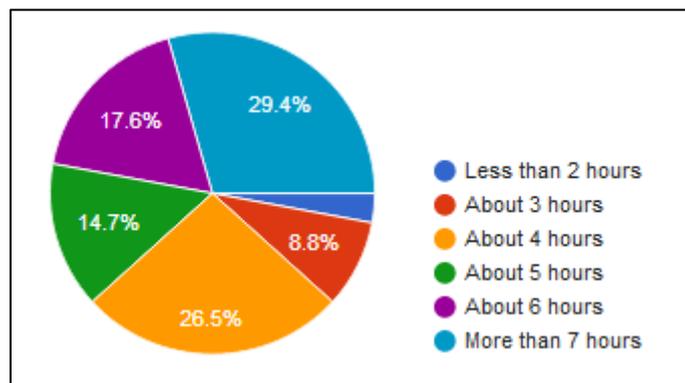


図1「学習者の自己評価による日本語能力」と図9「<37>IUCの授業をこなすための学習時間・1日あたり」の結果を纏め、表12に示した。

表12 学習時間と日本語力（自己評価）

学習時間	日本語力（自己評価）	回答者数
2時間以下	Advanced (N1 level or higher)	1
3時間程度	Advanced (N1 level or higher)	3
4時間程度	Advanced (N1 level or higher)	6
	Upper intermediate (N2 level)	3
5時間程度	Upper intermediate (N2 level)	5
6時間程度	Upper intermediate (N2 level)	6
7時間以上	Upper intermediate (N2 level)	2
	Intermediate (N2-N3 level)	7
	Lower intermediate or below (N3 or below)	1
		計 34

IUCでは基本的にどのクラスでも同じテキストを使用しているが、日本語能力の低い学習者には負担が大きいのではないかという意見が以前から教員から出されていた。また学生からは宿題の量を減らして欲しいという要求もある。IUCでは予習段階で読み物を読み、授業では議論を行うという活動が多い。クラスで扱う量や進度、課題の量は調整してはいるが、表12を見る限り更なる調整が必要か、あるいはIUCの合格者の日本語能力の最低レベルの底上げが必要であるということが見えてくる。ニーズと学習効果、教育目標との兼ね合いを今後も検討せねばならないだろう。

4 教員へのアンケート・インタビュー結果

4 ではニーズ調査の結果に対する教員の意見や見解をまとめる。学習者のニーズに対して教員がどのような意見を持っているか、またニーズ調査の結果からどのような情報を教員が読み取ったのかを知るためである。また、インタビュー中に発せられたニーズ調査の項目にない意見や見解の一部も纏めている。紙面の都合上、教員の表現などを編集していることを了承されたい。

4-1 ニーズ調査の結果に対する見解

ニーズ調査の結果に対して教員 Z は「結構予想通り／各技能の重要度については納得した」、教員 Y は「だいたいこんなもの」、教員 V は「学習者の回答は全体としては予想通りだと思う」、教員 U は「非常に予想外というものはなかった」というように、すべての教員がおおよそ予想通りとしている。その一方で、教員 V は「ただ、学習者の要望をどれだけ取り入れるべきかというのは難しい問題でもある。また少数の意見をどの程度反映させるかという点も難しいと思う」、教員 W は「自分が大切だと思っているもの。今大切なのか、これから先必要なのか、ないからしたいのか、能力が低いから補足したいのかなどがわからない」というような、ニーズ調査の結果は予想通りだが結果をどのように考えるべきかという意見があった。ニーズ調査の結果をどのように生かすかは今後の課題である。

IUC は日本研究または実務において高度なレベルの日本語の教育を目指す機関であることから、教員 W の「日常会話やメールが書けることが必要だと思っている学習者が思ったより多いと感じた」、教員 V の「『日常的な日本語を使いたい』が多かったのが予想外だった」、教員 T の「専門的な日本語を希望する人が思っていたより少なかった」というように日常的な日本語を重視している学習者の多さに言及する教員もいた。IUC のカリキュラムにおいて、日常的な日本語と専門的な日本語をどの程度の割合で提供して行くかというのは大きな問題になっている。教育目標との兼ね合いを考慮して行く必要がある。

特定の科目について教員 T は「『新待遇表現』⁸のテキストにメールを書く課題がユニットごとに入っていたが、ニーズ調査の結果からメールに対する要望が高いことが分かり、テキストの構成の意味が理解できた」、教員 U は「<2>の『ビジネスや実務に日本語が必要だから』をビジネス目的と単純にとらえると、仕事を目的とする学習者が多いと感じた／ほぼ全員が講義形式でなく活動形式を希望しているという結果は、予想通りである／読む・書くも、聞く・話すと同等に重視していると分かった」、教員 Q は「インタビュー調査をあまり重視していない人が意外に多い」と述べている。ニーズ調査を行う意義の一つに、「学習者は何を欲しているかがわかり、授業が再評価できる情報を与えてくれる」（若林 1999: 69）ということがある。特定の科目に関しては教員自身が担当しているものについてのコメントであり、教員自身の授業への振り返りともなったようである。本ニーズ調

査の結果を受けて、即日授業内容を大幅に変えた教員は皆無であったが、後期や来年度の授業内容を修正した教員は存在した。

4-2 IUCの学習者像① 学習状況と態度

インタビュー中に、どのような学習目的を持った学習者が多いかということに関して触れた教員もいる。教員 T は「ビジネス界に入りたい人か、日本研究者になりたい人が入るのが IUC のイメージ」、教員 R は「IUC の学習者は専門性があると思う」としている。教員 V は「ビジネス・ブラッシュアップ組が増えていくだろう」、教員 R は「学習目的に「就職」を上げた学習者が多かった。以前と比べ増えた印象がある」、教員 S は「学ぶ目的に思った以上に幅があった」、教員 W は「全体的に各自目的をもってセンターに来ていると感じた」と述べている。

国際交流基金 (2017a, 2017b) によれば、現在のアメリカやカナダでは表 13 のように日本語学習者は少なくはない。学習者数における各国・地域の割合ではアメリカは 4.7% を占め、2012 年と 2015 年の比較では 9.7% 増となっている。一方で表 14 にあるように、アメリカ・カナダともに日本語教育機関と日本語教師数が減少している。

表 13 日本語教育機関数・教師数・学習者数 (地域順/複数段階教育無)

地域	学習者 (人)				
	中等教育 合計	高等教育			その他の 教育機関
		日本語専攻	日本語専攻以外	課外活動	
カナダ	5,919	933	7,029	385	4,653
アメリカ	73,648	7,289	53,855	6,191	10,562

国際交流基金 (2017a: 47) 総括表から一部引用

表 14 地域別機関数・教師数・学習者数

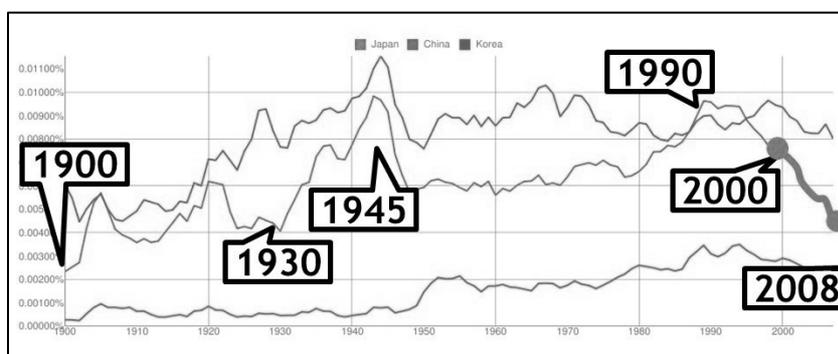
地域	機関			教師		
	2012 年 (機関)	2012 年 (機関)	増減率 (%)	2012 年 (人)	2015 年 (人)	増減率 (%)
北米	1,677	1,640	▲2.2	5,035	4,621	▲8.2

国際交流基金 (2017b: 11) から一部引用

日本語教員数の減少の原因として国際交流基金 (2017a: 31) は「(米国では) 外国語教育に関する政府予算が縮小される傾向が依然として続いていること、また現地において日本語教師の人材が不足していること」、「(カナダの中等教育機関では) 必修科目ではな

い日本語の授業に必要な予算が計上されずに講座の維持が困難となっている機関が多いこと、教師の退職と共に講座が閉鎖するケースがみられること」などを報告している。北米では中・上級以上を学べる日本語教育機関の減少、日本研究者としての就職先の減少など厳しい現状下であり、日本研究者を目指す学習者が減少しているという現実もある。また江上 (2017: 285) も図 10 を取りあげ「近年では“日本離れ”，すなわち海外の日本研究の退潮傾向が指摘されることが多い。その背景には，日本の経済低迷による研究支援力の低下，存在感の低下，加えて欧米諸国での人文学・地域研究全体の低迷もある」と指摘している。

図 10 Google Books の書籍本文中に「Japan」がどれだけ登場するか



江上 (2017: 285) 図 1 より

しかしながら表 2 にあるように、日本研究者や実務者を目指す日本語学習者は一定数存在する。IUC はこれまで以上に専門家を目指す中・上級以上の日本語学習者のニーズに応えられるような体制を整えて行くべきであろう。

学習者の学習状況や態度について、教員 Y は「最近の学習者はリスニングが良くなったと思う。ビデオなどは昔より理解が良いし、苦勞していない。ネットの発展が大きいかもしれない」、教員 T は「「正確さ」の重要性を認識した。自分の書いたものや話したことに対する教員のフィードバックに重きを置いている印象がある。クラスで間違いを指摘すると感謝される。直したいと思っている人が多い」、教員 S は「まじめ、完璧主義、貪欲である。学習者として非の打ち所が無い。他校と比較して、教えやすく、教え甲斐がある。学習者自身が日本語での穴を作りたくないと思っているようだ」と良い評価がある一方で、教員 Z は「実は N4 レベルがいる (N3 レベルをやったことが無い)」⁹、教員 Y は「漢字の書きの能力が低い。語彙力が落ちてきた。読む習慣がないようだ。これは英語でも同じらしい」という学習者の日本語力の低さを指摘する教員もいた。IT 技術の発達により言語教育は大きな転換期を迎えている。リスニング能力の向上や漢字を書く能力の低下に関しては、IUC の学習者も例外ではないようだ。読む習慣がないというのは日本語教育の問題ではなく、アメリカ・カナダでの初等教育および中等教育の変化によるものであると推察

されるため、今後の調査が必要である。

IUCの学習者像については、全体的に勤務の長い教員は以前の学習者と現在の学習者の日本語能力の異なりを指摘している。他大学や日本語学校で授業を担当している教員は、他校の学習者と比較しながらIUCの学習者について意見を述べている。いずれの指摘も2の「ニーズ調査の結果」との大きな隔たりは無く、学習者と教員の認識はおおよそ一致していると考えてよいだろう。

4-3 IUCの学習者像② モラトリアム型・無目的型

表1、表2から分かるとおり、IUCに進学してくる学習者は学習目的が明確であり、4-2から分かるように、学習者は非常にまじめで熱心だというのは教員の統一見解としても良いだろう。しかしながらその一方で、勤務の長い教員はモラトリアム型・無目的型の学習者の存在も指摘している。教員Yは「なんできた？もいる。何を求めてIUCに来たのかが分からない人もいる。最近は「話したくありません」「意見はありません」という学習者が増えてきた。学部生で日本語への目的意識が無いというのが一番困る」、教員Xは「無目的型はこの10年で増えた。入学後に無目的型であることが判明するため、教員側でカリキュラムやクラス活動などで個別に対応するしかない。ただ、個別対応の教員側の負担は大きい」、教員Rは「就職希望者が増えた。モラトリアムも増えた」と述べている。

勤務の長い教員は、以前からIUCにモラトリアム型・無目的型の学習者は存在していると思っていたが、本ニーズ調査の結果として明確になったと述べている。IUCのクラス活動では読み物やビデオ等を予習し、授業で内容確認後に自らの専門や興味・関心に絡めて意見を述べることを求められることも多い。このため漠然と日本語力を上げたいとしか考えておらず、「何のために、どのような分野の、どのような技能の日本語力を上げたいのか」が明確ではない学習者はIUCでは苦勞する。しかしモラトリアム型・無目的型の学習者からも一定のニーズがあるならば、IUCとしてもカリキュラムも対応して行くしかないと考え、2017-18年度から新しい専門科目分野として「日本学概論」を設置するなどの対応も行っている(参照：結城他2018)。しかしながら学習者のニーズにすべて対応した結果、IUCの教育理念や目標から大きく外れるようなことは避けるべきであろう。またモラトリアム型・無目的型の学習者のモチベーションをどのように保つかも課題である。4-1で教員Yが述べているように、学習者のニーズをどれだけ取り入れるべきかは難題である。

以上、4では教員へのアンケート・インタビューを見てきた。学習者に対するニーズ調査の結果と教員の学習者に対する認識には乖離はほぼ無いといえることから、IUCは教育理念などの現状を大幅に変更する重要度はないだろうとは言える。しかしながら水谷信子(1997:8)は「(IUCは)日本社会ではあまり知られることがなく(中略)日本社会での存在感の強化がなければ、これからの荒波を切って進むことは、むずかしいのではないかという恐れを抱く」としていた。今後は時代の潮流や学習者のニーズを考慮し、中・上級の

日本語教育とはどのようなものかを熟考しつつ、日本研究者や実務者を目指す学習者に合うカリキュラムや教育内容を更に追求していくべきである。

5 学習者へのインタビュー結果

5 では学習者へのインタビュー結果を纏める。紙面の都合上、表現などを編集しているものもあることを了承されたい。

5-1 ニーズの変化の理由

ニーズの変化の理由は、①進路変更、②学習者自身の能力の変化、③授業からの影響の3つに大別される。

まず①の進路の変更であるが、学習者 A、学習者 B、学習者 H の3名は入学当初は進学予定であったが、前期終了時点には進学をやめ、就職活動を行うことにした。学習者 A、学習者 B、学習者 H は「日本語能力の各技能の重要度」の学術系の質問項目において「大変重要」から「それほど重要ではない」という意見が変わっている。学習者 A は「IUC に入ったときは大学院進学の前だった。現在は就職を希望している。このため学術的な文章はそれほど必要ではなくなった。今はビジネス関連が必要だ」、学習者 B は「学術界に疑問を持つようになり、学術界に進むかどうか悩んでいる。特にアメリカでは就職も厳しく、就職できたとしても環境が良くない。日本語を勉強したら就職先が広がるのではないかと思う。進路に対する考えが変わった」、学習者 H は「将来に対する見方が変わった。入学時は学術界に進もうと思っていたが、様々な可能性を考えるようになった。専門的な日本語よりも、幅広い日本語を身につけたい」と述べている。学習者 I は学習者 A、学習者 B、学習者 H とは異なり、修士課程での専門を変更したため「漫画やアニメの関係者へのインタビューの必要性が出てきたため、リスニングとスピーキングを重要視するようになった」と述べている。学習者 I は研究テーマを文学から漫画・アニメへ変更したことに伴い、後期は学術的な日本語よりも、今後の研究に必要な漫画のセリフなどを理解するための日常的な日本語を学びたいとしている。IUC 在学中に進路の変更を考えるに至った学部卒・修士課程の学習者は、進路先の変更に伴い日本語学習の目的やニーズが変化していた。

次に②の学習者自身の能力の変化であるが、1) 自分の能力の不足を補いたいので重要だとする場合、2) 特定の日本語能力に自信がついたので次の段階に進みたい、あるいは必要がなくなったという場合、3) 自信のあるものから伸ばしたい場合、の3つに分かれる。1) について学習者 I は「最初に日本に来たときは、話すのは弱かったと思う。最初のインタビュー試験はかなり難しく感じた。もっと身近な話題が話せるようになりたいと思った」と述べている。2) について学習者 D は「入学当初は話す機会が多いほうが良いと思った。

IUC の前期に話す練習をしたら話せるようになってきたので、後期は話す機会より、意見を正確に伝えることを重視するようになった」、学習者 F は「前期で専門的な日本語が分かるようになり自信がついたので、後期は専門的な日本語の重要度が下がった。一方で日常生活やライトノベル、男性の日本語などで分からないことがあり、後期での学習として日常的な日本語の重要度を感じるようになった」、学習者 E は「2 学期に待遇表現を学び、実務の日本語はもうばっちりという自信がついた。このため後期は実務の日本語は必要ないと思った」と述べている。3) について学習者 C は「話す能力が弱すぎるので、他の能力を先に伸ばそうと思っていた。だから IUC では話す能力以外のものを伸ばそうと考えた」、学習者 G は「全部の間違いを直されたら何も言えなくなる。話す力が伸びてから、間違いを直して欲しいという意見だった」と述べている。また 1) から 3) とはやや異なり、学習者 F は「郵便局で問題が発生した。特に日本は役所などの事務的な手続きには非常に厳しい。だから日常の日本語が必要だという意見が変わった」、学習者 I は「9 月は先生とのやり取りにメールが必要だからメールが重要だと思った。今は返事にも困らないようになったので授業では必要ない」という実体験からの意見もあった。学習者自身の日本語能力の変化によるニーズの変化は、自身の日本語学習の目的と日本語能力を客観的に分析した結果といえるだろう。また実体験に基づいたニーズの変化は、学習者自身の日本語能力の変化というよりは、生活の上で必要性を実感したためのものである。

最後に③の授業からの影響によるニーズの変化は、授業を受けた後により自分に合う方法や好む方法を見出している場合である。学習者 A は<5>において「IUC では日常会話のチャンスが多い。前期は簡単な内容が多かったので、『身近な話題だが話す機会が多い』から後期は『話す機会は減るが抽象度が高い』に意見が変わった」、学習者 B は<8>において、「まじめなクラス」から「明るく楽しいクラス」に変えているが、その理由を「A 先生の授業を受けて、すごく楽しかったから」としている。学習者 C は「実務の日本語は重要」から「実務の日本語は重要ではない」に変わったが、その理由として「IUC で学ぶ硬いビジネス日本語を（行きたい）業界で使ったら、コミュニケーションに支障が出る。『ビジネス』に抱くイメージが異なっていたようだ」としている。学習者 D は「実務のメールは重要」から「実務のメールは重要ではない」に変わった理由として「前期の授業の内容は研究者向けの内容ではなかったと思う。だから重要ではないと思った」、学習者 E は「IUC 入学当初は、博士論文からの一種の休憩時間のような気分でした。しかし厳しく直してくれる先生方に会って、やはり何かを家まで持って帰りたいと思うようになり、12 月には楽しいクラスより真剣なクラスで学びたいというように気持ちが変わった」としている。IUC で実際に授業を受け、自らがイメージしていた内容とは異なるので意見が変わったという場合が多い。

5-2 ニーズが変化しない理由

博士課程の学習者はニーズが変化しない理由も述べていた。学習者 D は「日本で研究したい。IUC は十ヶ月しかないので、博士論文に必要な読む能力が第一である」、学習者 E は「専門に関する日本語というのはビジネス日本語というイメージがあった。天気や買い物などの日常会話は自分には必要がない」、学習者 G は「今の自分に何が必要なかを自分なりに取捨選択してきた。研究にはインタビュー調査が必須である。被験者を観察するとき、何が起こるかを理解したい。専門的な日本語能力を伸ばしたい」としている。博士課程に所属している学生は博士論文を執筆する必要がある、博士論文のために自分が必要とする日本語が明確である。博士論文の執筆や研究に不必要であると判断した日本語は、できるに越したことはないが優先順位が低く、IUC の在学中に優先順位が高くなることはほぼ無いと考えてよいだろう。ニーズの重要性が変化しているものは、自身の研究に必要な授業だと思っていたが、受講してみると求めていた内容とは異なっていたという評価であったという特徴がある。

5-3 カリキュラムに対する意見

5-3 ではニーズ調査の質問項目に関連して、学習者から出された意見を取りあげる。

学習者 A は「待遇表現は良かった。日本人と話すときに、自分の日本語の表現も変わったと自覚している」、学習者 E は「職場ではまともな日本語を話したいと思っていた。IUC で一番役に立ったのは待遇表現だと思う」、学習者 H は「待遇表現などの日常で使える表現を学びたい。昼休みに同僚と話すというようなイメージ。待遇表現はとても勉強になった。もっと待遇表現の時間が長いほうが良かった。せめて前期を通してやってくれると更に役に立つと思う」などの意見が学生から出された。待遇表現は学習者からの評価も高く、IUC の特徴的な科目であるといえるだろう。また学習者 H は「新聞は最初は読みにくかったが、新聞を読めるようになるというのは大事な日本語の技能だと思うので、新聞の時間があってよかった」と述べている。研究者志望の学習者は新聞を扱う時間を不要だとする向きもあるが、学習者 H のように上級の読解力といえば新聞が読めることと考えると、新聞を扱う時間を良しとする学習者も毎年一定数存在する。上級の日本語教育として学習者が何を求めているのかを更に調査する必要があるだろう。

カリキュラムに対する要求も出た。学習者 A は「レクチャーシリーズは勉強になるが、文化的なことかもしれないと思う。例えば校外学習を増やして欲しい」、学習者 C は「夏休み中の宿題はもっと早くやりたい。量はもっと多くて大丈夫。IUC に来てできないと思うよりは、来る前に勉強しておきたかった」、学習者 D は「IUC では読む力を伸ばしたいと思っていたのに、前期は期待はずれだった。もっと早くから読む練習をしたほうが良いと思う」、学習者 E は「電子時代でも漢字を書く必要はあると思う。IUC の学習者として漢字を書けるようになることは必要だろう」などである。入学前の宿題については改良を試み

ているが、量の調整には至っていない。校外学習については日本の大学などの聴講時間を確保するなどの案も出ているが、日本の大学側との調整に苦慮している。学習者の日本語力向上に費やすべき時間数と、日本で生活することでしか得られないであろう社会経験との時間数を更に検討して行く必要があるだろう。

IUC のカリキュラムを十分把握せずに入學してきた学習者も少数ではあるが存在する。学習者 A は「9月の時点では、IUC でどのように勉強するかわからなかった。以前は JLPT₁₀ のような学校だと思っていた」、学習者 C は「スタンフォードのホームページには観覧車があったり、文化的な雰囲気があり、とても楽しそう。魔法のカリキュラムというかんじ。IUC での実生活、辛さなどを事前に知りたい」、学習者 F は「IUC に期待していた事は無かった。IUC で一生懸命勉強したら、日本語学習歴に意味を持たせることができると思った。IUC に来る前にカリキュラムは少し調べたが、よく分からなかった。IUC に行けば日本語が伸びる、という意識のみだった」と述べている。本調査では IUC は日本語教育機関であるということは理解しているが具体的なカリキュラムの内容は把握しておらず、表 1 にあるように「IUC に進学すると利益がありそうだから (89.6%)」、「有名だから (25%)」という理由で進学してきている学習者も少数ではあるが一定数いることも明らかになった。IUC のカリキュラムを十分把握せずに入學してきた学習者の場合、4-3 で扱ったモラトリアム型・無目的型や就職活動ばかりを行う学習者であることも多い。アドバイザーや先輩に推薦された場合ならまだしも、IUC の教育目標やカリキュラムと自身との不適合により、学習者が不満を溜め込む、あるいは学習者自身が苦しむことがしばしばある。このような学習者の不満や苦しみを解消すべく、入學の申し込み時点で教育理念などを記した 3 つのポリシー¹¹やシラバスを周知させるなどの、何らかの対策を今以上に講じなければならないだろう。

以上、5 ではニーズの変化項目の多かった学習者へのインタビューを纏めた。ニーズの変化の理由は、進路変更、学習者自身の能力の変化、授業からの影響であり、学習者の属性や日本語能力、経験に関わっていることが判明した。属性別のニーズ分析については今後の研究課題の一つとしたい。

6 今後の課題とまとめ

本稿では IUC における中・上級の日本語学習者に対するニーズ調査報告を行った。ニーズ調査では、IUC のカリキュラム改良に参考になると考えた質問項目を設定した。教員 W も指摘しているように、本調査では「学習者自身が認識している日本語能力の不足点」に対する質問項目が欠落しているといえる。2018-19 年度の調査結果と比較をするため、2019-20 年度も同じ質問項目でのニーズ調査を予定しているが、2020-21 年度以降もニーズ調査を続ける際は、日本語能力の不足点に関する質問項目も設定する、求めるクラス運営の聞

き方を工夫する、日本語能力の各技能の重要度での問い方を統一するなど、改良すべき質問項目もある。

本ニーズ調査の結果は、教員の予想通りであるといえるものであり、学習者と教員間でIUCに対するニーズの認識の乖離はほぼ無かったことが明らかになった。また教員と学習者にニーズ調査の結果に対するアンケートも実施した。本稿では第1回と第2回のニーズ調査において変化の大きかった学習者にインタビューを実施したが、今後はカリキュラムに反映させるべく、所属などの属性ごとのニーズにも注目したい。

IUCでは学習者全員に対するニーズ調査を行ったことは無く、本稿はニーズ調査の結果を報告として記録に残すことを第一義としている。今後のカリキュラムの改良とIUCの方向性への決定にわずかでも役立つことができれば幸いである。

謝辞 本調査にあたり調査やインタビューに御協力してくれた学習者、教員の皆さまに御礼申し上げます。

注

- 1 IUCでは佐藤(2018: 145)にあるように「日本語学習環境も大きく変化している一方で、センター(IUC)が受け入れる学生も変容しており、センターの日本語教育機関としての位置づけを再確認することで、センターに求められる教育を明確化し、そのカリキュラムを再検討すべきときに来ている」と考え、2017年にカリキュラム検討委員会を設置した。
- 2 ESPは「English for Specific Purposes」の略。
- 3 LSPは「Language(s) for Specific Purposes(s)」の略。
- 4 入学時の申請によっている。例えば2018年9月入学の際に「PhD 2023」とされた場合は2023年度に博士課程を修了予定となるが、PhDとして数えている。
- 5 国際交流基金のホームページには、N1がAdvanced、N2がUpper intermediateということとは明記していない。本調査では学習者にイメージしやすいように便宜上AdvancedにN1、Upper intermediateにN2、IntermediateにN2-N3、Lower Intermediate or belowにN3という表記をつけている。
- 6 カリキュラム検討委員会の専任講師3名を除いた専任講師6人、非常勤講師8人である。
- 7 個人情報も含まれるため、割愛する。
- 8 待遇表現とはIUCで出版した『FORMAL EXPRESSIONS FOR JAPANESE INTERACTION 待遇表現』(1991)のこと。現在2020年3月に『新待遇表現』の出版を目指している。

- 9 IUC の合格基準は日本語能力だけではなく、研究能力、業績、実績、将来性なども加味される。
- 10 Japanese-Language Proficiency Test の略。日本語能力試験（国際交流基金 2019）。
- 11 3つのポリシーとは、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーである。具体的な内容については結城(2019)を参照されたい。

引用文献

- 英保すずな・内藤裕子・渡嘉敷恭子 (2014)「国内外の日本語教育機関における初級日本語教材の実態調査・ニーズ調査と分析結果」『関西外国語大学留学習者別科日本語教育論集』24 pp.37-38
- 江上敏哲 (2017)「海外における日本研究と図書館：概観および近年の動向・課題と展望」『情報の科学と技術』67 巻 6 号 情報科学技術協会 pp.284-289
- 岡野喜美子・長田紀子・シュック陽子 (1989)「ニーズ調査報告と分析—国際部教科書作成を前提に一」『講座日本語教育』第 26 分冊 早稲田大学日本語研究教育センター pp.231-247
- 金田章宏・吉野文・和田健 (2006)「学部留学習者に対する日本語・日本事情ニーズ調査」『人文と教育』(2) 千葉大学 pp.111-124
- 国際交流基金 (2017a)「海外の日本語教育の現状 2015 年度日本語教育機関調査より」国際交流基金
- 国際交流基金 (2017b)「海外の日本語教育の現状 2015 年度日本語教育機関調査より」総括表 国際交流基金 pp.46-61
- 佐藤有理 (2018)「カリキュラムを再検討する取り組み —教育目標と評価の見直しを中心に—」『日本研究センター教育研究年報』第 7 号 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター pp.145-160
- 佐藤友則・秋庭裕子 (2002)「第 3 回 信州大学の留学習者のニーズ調査—2001 年 11・12 月調査において—」『信州大学留学習者センター紀要』第 3 号 pp.95-110
- 佐野ひろみ (2018)「教育実習におけるコースデザイン演習」『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』9 巻 国際教養大学専門職大学院 pp.1-13
- 須藤拓 (2016)「学習者に合わせて調整可能なコースデザインを目指して」『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』7 巻 国際教養大学専門職大学院 pp.59-85
- 中田聖子 (2015)「学習者のニーズを反映したコースデザインを目指して—形成的ニーズ分析に基づくコースデザイン調整—」『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミ

- ユニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』6巻 国際教養大学専門職大学院 pp.117-146
- 水谷修 (1997)「センター設立の意義の再確認を」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』20 20号特別記念号 pp.3-4
- 水谷信子 (1997)「センターを思う」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』20 20号特別記念号 p.8
- 峯正志、長野ゆり (2004)「日本語教育に関するニーズ調査結果」『金沢大学留学者センター紀要』(7) 金沢大学留学者センター pp.59-73
- 峯正志・深川美穂 (2015)「金沢大学総合日本語プログラムにおける学習者のニーズ調査報告」『金沢大学留学者センター紀要』(18) 金沢大学留学者センター pp.45-61
- 孟熙・小野正樹 (2012)「筑波大学留学者センターにおける学習者のニーズ分析 —J500-900「読む」の場合—」『日本語教育論集』第27号 筑波大学留学者センター pp.299-317
- 結城佐織・松本隆・橋本佳子・大沢えり (2018)「選択A『日本学概論』2017-18年度実践報告」『日本研究センター教育研究年報』第7号 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター pp.123-136
- 結城佐織 (2019)「2018-19年度カリキュラム検討委員会報告」『日本研究センター教育研究年報』第8号 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター pp.190-209
- 若林秀明 (1999)「オーストラリアの大学におけるニーズ分析」『世界の日本語教育』9 国際交流基金
- Berwick, R. (1989) Needs assessment in language programming: from theory to practice In R. K. Johnson (Ed.) *The Second Language Curriculum*. Cambridge: Cambridge University Press
- Brindley, G.P. (1989) The role of needs analysis in adult ESL programme design In R. K. Johnson (Ed.) *The Second Language Curriculum*. Cambridge: Cambridge University Press
- Hutchinson and Waters (1987) *English for Specific Purposes* Cambridge: Cambridge University Press
- The Inter-University Center for Japanese Language Studies (1991)『待遇表現 FORMAL EXPRESSIONS FOR JAPANESE INTERACTION』 ジャパンタイムス社
- Tony Dudley-Evans, Maggie Jo St John (1998) *Developments in English for Specific Purposes* Cambridge University Press

URL

- 国際交流基金「日本語能力試験 JLPT」<<https://www.jlpt.jp/index.html>> (2019.8.4 閲覧)
- スタンフォード大学 IUC ホームページ <<https://web.stanford.edu/dept/IUC/cgi-bin/>> (2019.9.2 閲覧)

IUC : アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターホームページ

<<https://www.iucjapan.org/>> (2019.7.19 閲覧)

資料

資料1 IUC Needs Survey 18-19 第1回 質問項目

1	I chose the IUC because (select all that apply): It will help me improve my Japanese for academic or work purposes / It is famous / It was recommended by my teachers, fellow students, school, etc. / I received funding / I thought that attending would be helpful for my career / It provides opportunities to meet with people from other fields / Other ()
2	I want to study Japanese because (select all that apply): It is necessary for my research / It is necessary for business or work purposes / I want to be an interpreter or translator / I want to use it in daily or life or to conduct daily conversation / It is necessary for my hobbies or interests / Other ()
In class, it is important to me that:	
3	Teachers are lenient about mistakes/Teachers are strict about mistakes
4	I learn how to get my point across, even with many mistakes/I learn how to communicate with a minimum of mistakes
5	I have lots of opportunities to speak, even if the content is simple/I have opportunities to speak on difficult topics, even if the number is limited
6	Listening & Speaking/Writing & reading
7	Classes feature active learning/Classes take a lecture style
8	Class is fun/Class is conducted seriously
9	I learn Japanese for daily use/I learn Japanese for academic or work purposes
10	I rate my own level of Japanese as (choose one): Advanced (N1 level or higher) / Upper intermediate (N2 level) / Intermediate (N2-N3 level) / Lower intermediate or below (N3 or below)
Rate the importance you place on the following Japanese language skills:	
By Skill: Reading Comprehension	
11	Ability to read academic articles, books, and materials related to my research in Japanese
12	Ability to read business-related materials, magazines, and e-mail in Japanese
13	Ability to read general-interest books and newspapers in Japanese

14	Ability to read announcements, documents, and e-mail necessary for daily life in Japanese
By Skill: Writing Ability	
15	Ability to write academic articles in Japanese
16	Ability to prepare materials for meetings and other business purposes in Japanese
17	Ability to prepare manuscripts for presentations in Japanese
18	Ability to write compositions on general topics in Japanese
19	Ability to write e-mail in Japanese
By Skill: Listening Comprehension	
20	Ability to understand lectures and conference/study group presentations in Japanese
21	Ability to understand work-related presentations and meetings in Japanese
22	Ability to understand news and radio and TV programs in Japanese
By Skill: Speaking Ability	
23	Ability to speak on academic topics in Japanese
24	Ability to speak on work-related topics in Japanese
25	Ability to speak logically and extensively on difficult topics in Japanese
26	Ability to speak on abstract topics in Japanese
27	Ability to communicate well enough to get by without difficulty in daily life in Japanese
By Skill: Two-Way Communication	
28	Ability to conduct academic presentations and take part in Q&A at conferences/study groups in Japanese
29	Ability to conduct presentations and take part in Q&A for work purposes in Japanese
30	Ability to carry out discussions or negotiations related to academic or work topics in Japanese
31	Ability to conduct interview surveys in Japanese
32	Ability to converse sufficiently well to manage without difficulty in daily life in Japanese
By Skill: Kanji (漢字)	
33	Ability to read <i>kanji</i>
34	Ability to write <i>kanji</i> by hand
35	Ability to understand the meaning of <i>kanji</i>

- ・表の左の数字は質問項目番号
- ・質問項目番号<1>、<2>、<10>は選択肢から一つ選ぶ
- ・質問項目<3>-<9>は1から7の中から重要度に即して一つ選ぶ。
- ・質問項目<11>-<35>は、1 (not important)から4 (extremely important)の中から一つ選ぶ。

資料2 IUC Needs Survey 18-19 第2回 追加調査項目

36	If you feel that your needs have changed since the start of the IUC-program, please describe that below.
37	<p style="text-align: center;">In order to complete all of the work at the IUC successfully, outside of class, about how many hours do you think are necessary?</p> <p style="text-align: center;">Less than 2 hours / About 3 hours / About 4hours / About 5 hours / About 6 hours / More than 7 hours</p>

- ・資料1の質問項目1-2は、第2回の調査では聞いていない。
- ・資料2の英訳は筆者の責任にある
- ・質問項目番号<36>は選択肢から一つ選ぶ